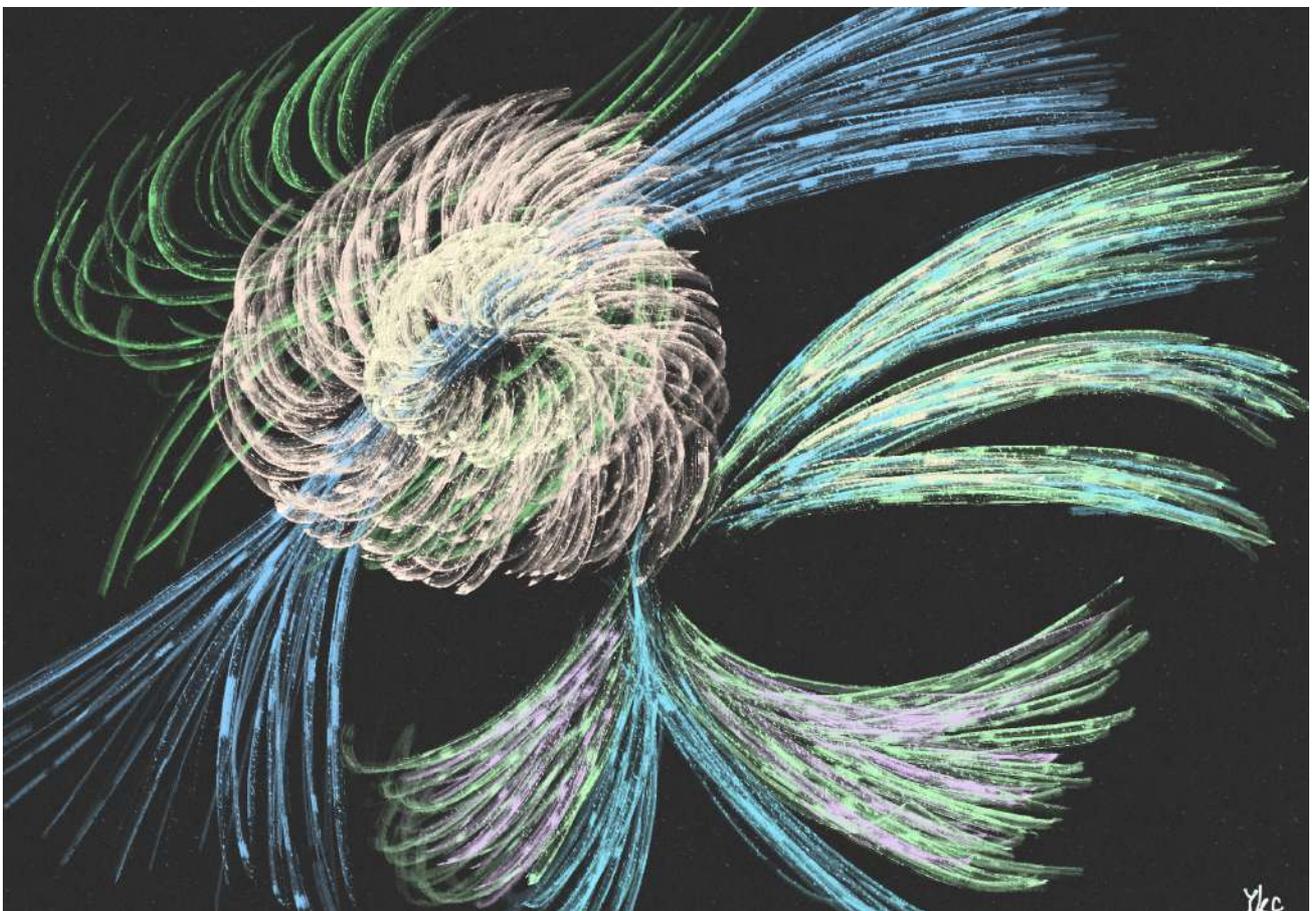

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 317

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.1481 闇の色彩_Colors of Darkness

目次

- 6321. 【日本滞在記】苦楽一如/貨幣・一人遊び・一望監視装置
- 6322. 【日本滞在記】『七つの会議(2019)』を見て/雑多な考え事
- 6323. 【日本滞在記】ライアーという楽器
- 6324. 【日本滞在記】小松美羽展「自然への祈り」を家族と訪れて
- 6325. 【日本滞在記】今朝方の夢
- 6326. 【日本滞在記】ディオニソス的人間とアポロン的人間/体験・経験・ロゴス
- 6327. 【日本滞在記】『あの日、欲望の大地で(2008)』を見て/伝統と美の罫
- 6328. 【日本滞在記】実家を出発する朝に/隠れたカリキュラム
- 6329. 【京都滞在記】京都に到着して
- 6330. 【京都滞在記】京都滞在2日目の計画
- 6331. 【京都滞在記】細見美術館と高山寺を訪れて
- 6332. 【京都滞在記】延暦寺訪問に向けて
- 6333. 【京都滞在記】種々の統合に向けて
- 6334. 【京都滞在記】書店を訪れて/テロメアと境界知能
- 6335. 【京都滞在記】考えること/『ちいさな哲学者たち(2010)』を見て
- 6336. 【京都滞在記】鞍馬山の訪問に向けて/今朝方の夢の断片/ハイパー・メリトクラシーの到来について
- 6337. 【京都滞在記】フィンランドへ繋がる道/写譜と伊藤若冲/道具的理性の反乱
- 6338. 【京都滞在記】鞍馬山を訪れて
- 6339. 【京都滞在記】今朝方の夢
- 6340. 【東京滞在記】東京に向かう新幹線の中で

時刻は午前4時半を迎えた。今日もまた晴れのようにであり、気温も26度近くまで上がるようだ。日本に帰って来てから、本当に良い天気が続く。天の恵みに感謝したい。

苦楽を超越した苦楽一如の在り方で日々を過ごしていくこと。それについて昨日考えていた。創作活動のみならず、日々生きていると苦楽があると思うが、よくよく自分の日々の在り方を眺めてみると、もうそうした二分法的な感覚を得ることなく、それらを超越した形で日々を過ごしていることがわかる。この在り方は今後より一層深めていこう。

昨日、ゲーテや西田幾多郎も一生涯に渡って日記を書き続けていたことを知った。ちょうど西田幾多郎については、実家に帰って来てから3冊ほど西田の書籍を読み返しており、金沢では西田幾多郎記念館に足を運ぼうと思っていた。

2人の偉人が日記を書き続けていたというのは興味深いことだが、偉人だから日記を書いたというよりも、日記を書き続けていたからこそ、つまり絶えず内省的に生きたからこそ、彼らが偉人になったという見方もできるだろうということを考えていた。

昨日も雑多なことを考えていた。1つには、価値の乗り物としての貨幣に乗っているものがひどく限定的であることが、経済金融における問題の根源の1つかもしれないということを考えていた。貨幣に乗っているものが限定的であればあるほど、貨幣を通じて豊かな社会をもたらすことは難しくなるだろう。貨幣には、今よりも豊かな意味と役割を持たせることが大切だ。

2つ目として考えていたのは、私は一人っ子であり、一人遊びの会話が内面化されて思考になるということを考えると、一人遊びによって自らの思考が育まれていったのかもしれないということだった。大人になってからも基本的に人とつるむようなことはほとんどなく、欧米での生活においてもそうだ。一人の時間を大切にしている、その間はずっと一人遊びの延長上にある諸々の活動に従事し続けている。それが自らの思考を育むことに何かしらの貢献をしているようだ。

3つ目として、ジェレミー・ベンサムが提唱した一望監視装置のようなものが、日本社会には至る所に埋め込まれていて、人々はお互いを監視合っているということを考えていた。そこに同調圧力が

加わり、人々は互いが互いを監視しているという意識なく監視し合っていて、窮屈さが所与になっているため、解放された状態というのを知らない。日本に帰って来て人々の様子を眺めてみると、互いが互いを監視し合うことによる窮屈な制約の中で生きている姿を見る。

それでは今から、絵画の創作と作曲実践をして、今日もまた読書に励んでいこうと思う。昨日相当の数の書籍を再読し、再読が必要な書籍はわずか6冊となった。それらは午前中の早い段階で再読が完了するであろうから、あとは新しく購入した30冊ほどの書籍をざっと一度読んでおこうと思う。

山口県光市:2020/10/12(月)04:50

6322.【日本滞在記】『七つの会議(2019)』を見て/雑多な考え事

時刻は午後2時半を迎えた。今、瀬戸内海は太陽で輝いていて、波が楽しげに踊っている。バルコニーからの眺めは本当に素晴らしい。オランダでは聞こえてこないトビの鳴き声が高らかに聞こえる。大空を自由に舞うなんと気持ち良さそうな鳴き声だろうか。

今日は午前中に、父の本棚からナラティブセラピーに関する書籍を借りて読んだ。また早朝には、知人の門林奨さんが翻訳した『インテグラル理論を体感する 統合的成長のためのマインドフルネス論』を読んだ。そこからは辻邦生先生の『辻邦生が見た20世紀末』を読んでいた。午前中の読書はすこぶる捗り、ここからもまた読書をしていこうと思う。夕食までの時間と夕食後の時間を使って、『現代政治学の名著』『政治学の名著30』『社会学の名著30』を読み進めていく。

つい先ほど、『七つの会議(2019)』という映画を見た。これは、日本の企業体質や企業文化の観点から企業倫理を考えていくのに大変素晴らしい作品かと思った。この作品は、池井戸潤氏の同名企業犯罪小説をもとに、福澤克雄監督が制作したものだ。ストーリーは、中堅メーカー「東京建電」の営業一課で万年係長のぐうたら社員である八角民夫が、企業の不正を暴いていく物語である。

役者がとても豪華であり、実際に日本で行われている不正の構造やメカニズムもこの作品で描かれているものに近いのだろうと想像することができて、興味深く観賞していた。隠蔽に次ぐ隠蔽の中、内部告発者として八角が最後まで持ち続けていた倫理観が印象的である。物語の最後に、八角が「この世から不正は絶対無くならない」と述べていたが、八角のように企業内での異質な存在、ある

いはマージナル・マン(辺境人)とでも呼べるような人財がいることが、根絶されない不正に対する残された数少ない光のように思えた。

企業が仮に、人材採用と人財育成において標準化を進めていくなれば、八角のような存在はますますいなくなってしまうだろう。そうなれば、隠蔽体質は強化され、内部告発者も登場せずに、いつか製造欠陥によって人命に関わるような大事故を引き起こしかねないのではないかと思う。もちろんこれは製造会社だけに当てはまることではなく、他の業界の会社においても当てはまることだと思う。

映画の感想を書き終えたところで、午前中の読書を通じて考えていたことをいくつか思い出した。大衆操作に活用されるものは2つあり、1つはイデオロギーのような、人間の理性的な部分に訴えかけるものがあり、それを「クレデンダ」という。もう1つは、人間の感情に直接訴えかけるものがあり、それを「ミランダ」と呼ぶ。実際に大衆操作として用いられているものをみると、その両者が掛け合わさったようなものなのではないかと思う。大衆操作という観点から身の回りにある種々の事物を見ていこう。

もう1つ考えていたのは、身体運動が思考に投影されるということは、考え方や感覚の個性は、身体運動の個性に他ならないと言えるのではないかということだ。内面の個性を育む際に、身体の個性を育むことが大事になる。身体は唯一無二のものであり、それはすでに個性の産物であって、その個性に則って思考や感覚を育んでいくことが、真に個性を育んでいくことにつながるのだろう。こうした備忘録を書き留めながら、ここからまた読書をしていこう。山口県光市:2020/10/12(月)15:10

6323.【日本滞在記】라이어という楽器

時刻は午前4時半に近づいて来ている。今、真っ暗な世界の中に、瀬戸内海の波の音が響いている。今日も幸いにも天気にも恵まれる。

今日は、家族全員(両親と愛犬)で広島のウッドワン美術館に出かける。ここでは、現代アーティストの小松美羽さんの個展『自然への祈り』が行われていて、今日はそれを楽しみに家族全員で出かける。父も母も小松さんの実際の作品を見ることをとても楽しみにしている。

ちょうど昨日の夕食の際に、両親から山口県の近くにある印象的な美術館を2つほど教えてもらった。1つは、広島県の生口島にある平山郁夫美術館である。平山氏の作品は、島根県の足立美術館で見た記憶があり、仏教伝来の絵画作品が印象に残っている。もう1つ父から教えてもらったのは、山口県長門市にある香月泰男美術館である。こちらの美術館も、平山郁夫美術館と同じくいつか足を運んでみたい。

時刻は午前4時半を迎えたところだが、父はもう早朝の散歩に出かけている。自宅の目の前にある海岸沿いを毎朝朝早くに歩いているようなのだ。そして散歩から帰って来たら筋トレをして、プロテインを飲んでからエスプレッソを煎れるというのが日課になっているらしい。その日課は、美術館に行く今日も変わらない。

数日前に、母から「ライアー(古代ギリシャの豎琴)」という楽器を勧められた。ハープは以前から勧められていたのだが、まだ楽器の演奏に乗り出す気持ちにはなかった。しかし、ライアーを勧められた時にアマゾンを経由して実物を見せてもらったところ、見た目がお洒落であり、実際の音色をYoutube経由で聴かせてもらったところ、とても興味深い楽器だと思った。それは持ち運びできる大きさであり、旅の最中にちょっと演奏をするというのは、旅をさらに彩豊かなものにしてくれるのではないかと思った。そこから自分でも調べてみたところ、ライアーはハープとは異なる楽器のようだった。

楽器の構造と演奏方法に違いがあり、ハープにはピアノの黒鍵にあたる弦がなく、足元のペダルを操作して半音階を作り出す。一方で、ライアーには、ピアノの黒鍵にあたる弦があるとのことだった。ライアーでは、主に右手で白鍵にあたる弦を、左手で黒鍵にあたる弦を弾いていく。そうしたことから、シャープやフラットなども弾きやすいとのことである。その他の違いで言えば、音の大きさは、ライアーの方がハープより小さいため、自宅などで他の住人をそれほど気にすることなく演奏できる点も特徴だ。

ライアーという楽器を調べれば調べるほど、この楽器を演奏してみたくなって来た。以前、これまた母から教えてもらったことだが、自分の生活の中に旅が重要な役割を果たしていて、そして毎日詩のような曲を作っていることから、アイルランドの吟遊詩人ターロック・オキャロラン(1670-1738)に関心を持っていたことがある。オキャロランは、盲目のハープ奏者であり、ハープを片手にアイルラン

ド中を旅した。ライアーという楽器の音色を聴いていると、ふとオキャロランのことが思い出され、自然と自分に重ねている自分がいた。

以前より何か1つ楽器の演奏をしようと思っていたのと、自分が演奏するための曲を作りたいとも思っていたので、ここからまた少しライアーについて調べ、小さめのライアーを近い将来に購入したい。山口県光市:2020/10/13(火)04:43

6324.【日本滞在記】小松美羽展「自然への祈り」を家族と訪れて

時刻は午後4時を迎えた。つい先ほど、広島への日帰り旅行から帰って来た。今日は天気恵まれ、素晴らしい秋日和であった。

早朝の午前7時過ぎに自宅を出発し、父の運転する車で、広島のウッドワン美術館に向かった。コロナのせいもあり、旅行好きの両親も旅行を随分と控えていて、久しぶりの旅行とのことだった。

今日訪れたウッドワン美術館の近くには、幼少期の頃に何度か家族でキャンプに訪れていたもみの木森林公園がある。美術館に向かうまでの道のりは、どこか懐かしさを感じさせた。道中、動物学者のフォン・ユクスキュルが提唱した「環世界」という概念を思った。自然豊かな世界に流れるゆったりとした時間の流れ。それは人間界の時間の流れとは独立した形でゆっくりと流れているものだ。

普段から自分に固有の内的時間の流れの中で生きていて、それもまた非常にゆったりとしたものなのだが、改めて自然に触れてみると、内的時間感覚が浄化され、涵養されていくのを実感した。おそらくこうした感覚がもたらされることが自然に入ることの1つの良さだろう。

運転中に父も述べていたが、非日常体験の良さもそうしたところにある。現在は、異常が日常になってしまっている世の中であり、非日常を感じることによって、滋養を得ることも私たちにとって大切であろう。願わくば、自然に触れること、自然との共存が日常になるような世界がやって来て欲しいと思う。

今日は平日であったから、そしてコロナの余波もまだ残っていることから、行きの高速は空いていて、美術館が開くよりも20分ほど早く到着した。ところが駐車場には1台ほど、私たちよりも早く来た

人がいるようだった。開館までの間は、駐車場付近で新鮮な空気を吸いながら、美術館の周りを覆っている山々の景色を眺めていた。ちょうど紅葉が始まって来た頃であり、山はうっすらと秋の表情を見せ始めていた。

開館10分前になると、1人の男性が館内に入ってくのが見えた。どうやら少し早く開館をしてくれたようだった。私は両親にそれを伝え、私たちも開館よりも少し早く中に入れさせてもらった。そこからは両親と3人で色々と話をしながら作品をゆっくりと鑑賞していった。父は1つ1つの作品を丁寧に写真に納めていった。

各人が思い思いに作品を眺めていき、それぞれの感想などをシェアしていった。昨年、群馬とヴェネチアで見た作品もいくつかあったが、2019年や2020年に創作されたいくつかの作品は、今回初めて見るものだったので、とりわけそれらの作品の前で立ち止まり、じっくりと作品を鑑賞していった。

一番印象に残っているのは、やはり『神祈』という作品だろうか。この作品は、演出もあつてのことだと思うが、とても神々しい光を物理的かつ精神的に放っていた。父が撮った写真は神々しさが見事に反映されていて、写真で見ても素晴らしい作品であった。こうした神々しさが見る人たちの心と魂を癒していることがすぐにわかる作品であったことは間違いない。

その他に印象に残っているのは、『宝雨の中で一對の艶緑の楓は苔の地平線にて門となる』という作品だ。これは遠くから母と見ていた時に、母が何気なく述べた感想によって新しい観点で作品を眺めることになった。この作品は、苔を境界線に見立て、上部に人間が住む世界、下部は地中に広がる世界を描いていた。端的には、下部の世界は目には見えない世界であり、そこに豊かに広がる生命の世界を描いている。

私はそれを作品の解説から知ったが、母はそれを遠くから見て見抜いていた。その他にも母の何気ない感想によって、色々と気づかされるが多かったことが印象に残っている。小松さんの個展を十分に堪能した後に、常設展も楽しみ、その後近くの森の中のカフェレストランで昼食を摂って自宅に帰って来た。両親と愛犬と素晴らしい時間を過ごすことができたことに大変感謝している。

今日の美術館訪問の記憶は、とても大切な思い出として自分の中に一生とどまることになるだろう。
山口県光市:2020/10/13(火)16:25

6325.【日本滞在記】今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。今日は実家に滞在する最後の日となる。明日からは京都に移動し、京都に4泊5日ほど滞在する。今回実家に滞在したのは1週間ほどだったが、1週間の間は本当に寛ぐことができた。父と母がいつも私がゆっくりできるように配慮してくれていることに心から感謝をしたい。

結局昨日は、午後の3時半に広島日帰り旅行から帰って来てすぐに、父は台所に立ち、素晴らしい夕食を作ってくれた。料理の品数はいつもと同じぐらいに充実していた。今日の夕食もとても楽しみだ。

明日は京都にゆっくりと移動しようと考えていて、実家を出発するのは焦る必要がない。調べてみると、実家を13時に出発すれば、京都には16時に到着できるようだ。明日は特にどこかに観光に出かける予定はないので、ホテルのチェックインを済ませたら、駅の中にあるオーガニックスーパーで必要なものを購入し、ホテルでゆっくりしたいと思う。

今朝方は少し印象的な夢の場面があった。ストーリー全体を覚えているわけではないのだが、場面として、私はロープウェーのような乗り物に乗っていたことを覚えている。乗り物の中には日本人が随分と多くいたが、そこにお年寄りはおらず、全員が比較的若かった。ロープウェーが目的地に到着するかしないかのところで、突然止まった。そしてアナウンスが車内に突然流れた。アナウンスの声は女性であり、どうやら部品の不具合によって急停止することになったようだった。

だが、私はそれが単なる急停止ではなく、嫌な予感があった。端的には、ロープウェーが落ちてしまうような予感があったのである。すると、同じ女性の声で次のアナウンスがあった。「なんとか頑張ってください」そのような声が出た瞬間に、ロープウェーはガタリと音を立てて、頂上間近からズルズルと下の方に落ちて行った。乗客たちは皆パニックになっていたが、私と隣にいた男性だけが冷静であり、この事故は間違いなく製造会社の製造欠陥によるものだと思ってお互いに顔を見合わせた。そこで夢から覚めた。

夢から覚めた時に、こうした製造欠陥が人命に関わる極めて重大な問題であることを改めて思った。ちょうど先日見た『七つの会議(2019)』では、企業の不正が主題として扱われていたことを思い出す。夢の中の製造欠陥も間違いなく不正であり、そこに企業人たちの倫理的腐敗を見て取った。そして、こうした倫理的退廃というのは企業社会だけに蔓延っているのではなく、他の領域においても同じであろうと思われた。

それでは、今日もいつもと同じように、早朝の創作活動として、絵画を描き、曲を作っていく。本日は実家での滞在最終日であるが、最終日も変わらずに読書を続けていく。午後には映画を見て、散歩がてら近所のユニクロに行って必要なものを購入しよう。山口県光市:2020/10/14(水)05:43

6326.【日本滞在記】ディオニソス的人間とアポロンの人間/体験・経験・ロゴス

—聖なる「すべし」に従った者だけが魂の安らぎを得る—ニーチェ

時刻は午前9時半を迎えた。今日も晴天であり、朝日が瀬戸内海に降り注ぎ、海面が煌めいている。

ちょうど先ほど、母が午前中のピアノ練習を始めた。今、母の演奏を聴きながら日記を書いている。

早朝の創作活動を終えた後に、『ニーチェ みずからの時代と闘う者』を読み始め、先ほど初読を終えた。自分の身に降りかかるいかなる暗示をも理解し、叡智を創造していくディオニソス的人間。一方で、幻想を求め、決して自らの精神で叡智を創造していくことをしないアポロンの人間について思う。どちらの人間として日々を生活しているのか。それについては各人が問うべきものだと思う。

一方で、仮にディオニソス的人間として生きることを許さない時代精神や仕組みが世の中に溢れているのであれば、それについては適切な介入が求められる。この問題についてはいつも堂々巡りをしながらも、いくつかその介入方法の道筋が見えて来ている。

「よく眠れるために、今は目覚めていよ」というニーチェの言葉を解釈するならば、「来世で平穩を獲得するために、現世で覚醒せよ」という意味になるだろうか。現世での覚醒は、現世での平穩さも約束してくれるだろう。今の自分を取り巻く平穩さを見ると、そのように思う。

個人的な平穏さを実現させるだけではなくて、集合的な平穏さを実現させていくことがどれほど大事なことか。そしてそれがどれほど難しいことか。個人としてそれを実現させることさえ難しいのであるから、集合規模になると尚更である。だが、それを希求し、絶えずその実現に向けて行為をなしていくことの大切さを思う。それをニーチェとシュタイナーから学ぶ。

自分にとって大切な体験は、必ず経験に昇華させるように内省すること。ロゴスは、体験を経験に昇華させていく際に大きな力を発揮する。経験として結晶化したものは、それそのものがロゴスになっていく。そして、そのロゴスをもとに内省を継続させていくと、経験領域を肥沃なものにしていくことができる。これが体験、経験、及びロゴスの連関である。

昨日、家族で広島に日帰り旅行に出掛けた時、高速を下りてから山道を走っている時に、野生の猿と猪を立て続けに見た。かつて野生の猪を見たことはあったが、野生の猿を見るのは初めてだった。父は昔、よく1人で釣りに行っていたから、これまで何度もそうした野生動物を目撃したそうである。野生の猿と猪を比較してみた時に、前者の方が知性が高いことに気づいた。

野生の猿が5匹ぐらいいて、車道を渡ろうとしていた。その時に、数匹の猿が先に道路を横切った。そして、1匹だけ猿が取り残される形になった。ここで興味深かったのは、残った猿は先に渡って行った猿に盲目的についていくのではなく、きちんと自ら車を確認し、その場でいったん待機するという意思決定をしたことだ。果たしてどれくらいの現代人が自らの頭で意思決定をして日々生きているだろうか。

野生の猿の行動を見て、現代人の多くは、周りの行動に自動的に追従するような傾向があるため、多くの現代人の知性は猿以下なのかもしれないとふと思った。そのような出来事があったことを思い出す。山口県光市:2020/10/14(水)09:38

6327.【日本滞在記】『あの日、欲望の大地で(2008)』を見て/伝統と美の畏

時刻は午後4時に近づこうとしている。今、父が様々な具材の数種類のピザを作ってくれている。母が練習するピアノの音色が聞こえて来る。つい先ほど、近所のユニクロと書店に立ち寄った。ユニクロで必要なものを購入した後、隣接する書店でほぼ全てのコーナーを隅々と眺め、気になる書籍

は片っ端から手に取って眺めていった。一般書店で置かれている書籍を見ると、今の日本の世相を感じることができる。結局、葛飾北斎を特集した雑誌を1冊ほど購入して帰って来た。

明日からの4泊5日の京都旅行の最中に、どこかのタイミングで丸善に立ち寄ろうと思う。あと少しばかり購入したい書籍があり、それを大型書店で調べてみる。

今回の京都旅行では、鞍馬山と高山寺に訪れ、お隣の滋賀県にある延暦寺に足を運ぶ。宿泊先のホテルは、京都駅と目と鼻の先にあり、そこからはなんと鞍馬山や高山寺に行くよりも隣の県にある延暦寺に行く方が近いということに気づいた。3つの場所を1日に1つずつゆっくり訪れていこうと思う。天気やその日の感覚をもとに、前日か当日にどこに行くかを最終的に決め、気ままな旅を楽しむ。

先ほど歩いて買い物に出かける前に、『あの日、欲望の大地で(2008)』という映画を見ていた。これは、『バベル』の脚本家でもあるギジェルモ・アリアガ監督が作った作品である。物語は、幼少時代に心に傷を負った女性の異なる時空間をもとにストーリーが進んでいき、いくつもの伏線が収束していく形で展開していく。本作品を見ながら、人間の宿命や宿業を思った。また、罪の意識と治癒、そして再出発という展開に人間の普遍性を見出すことができる。

夕暮れ時の瀬戸内海を眺めながら、伝統というのは探し求めるものであるが、結局は探し求められないものであるという西部邁先生の指摘に考えを巡らす。結局は、伝統というのはそれを探し求めようとする構えであるという指摘にも納得する。ロイ・バスカーの考え方を応用すれば、伝統は「実在界(the real)」に存在していて、それが「現実世界(the actual)」で発揮されるかどうかは、伝統を探し求めようとする構えのあるなしに左右されるのではないかと思う。つまり、伝統に対して無関心であれば、伝統が現実世界でその力を発揮することはほとんどないのではないかということである。伝統を持つ組織やチームにおいて、伝統がうまく発揮されないことの背後には、そうした構えの欠如が存在しているかもしれない。

私たちは美を求める時、真偽、善悪の判断が一度保留になる。それが永遠に保留されてしまうと、美の危険な側面に入り込んでしまう可能性がある。美の罠に陥った人間たちの特徴はそれだろう。

音楽は、時間の流れの動き、感情や感覚の動きであって、単なる音の集合体ではない。ある曲には、作曲家の固有の時間の流れや感情・感情感覚のある法則性、ないしは規則性が内在している。そして、聴き手のそれと合致することによって、音楽の美的体験が生じる。そのようなことを考えていると、入浴の時間が迫って来た。今夜が家族と一緒に楽しむ最後の晩餐となる。山口県光市：2020/10/14(水)16:05

6328.【日本滞在記】実家を出発する朝に/隠れたカリキュラム

時刻は午前4時半を迎えた。先ほど、父が早朝の散歩のために浜辺に出かけて行った。

いよいよ今日が実家を出発する日となる。出発の時間はゆっくりと午後1時を考えている。そこから歩いて最寄り駅に行き、京都に向かう。京都のホテルに到着するのは午後4時であり、移動もそれほど時間がかからない。京都に着いてからは、近くのスーパーで夕食用の果物を購入しようと思う。

明日からはホテルでの滞在となるので食事のリズムを少し変える。滞在先は朝食付きのホテルのため、朝食を比較的しっかりと摂り、昼食は摂らず、夜は果物や野菜などの軽めのものにする。そのような食生活をしていこう。

4泊5日のうち、鞍馬山、高山寺、延暦寺をそれぞれ訪れ、どこかのタイミングで大型書店の丸善に行く。東京や大阪に滞在する際にも大型書店に立ち寄ることができるが、一応京都でも書店に立ち寄って、何か運命的な書物との出会いがないかを楽しみにする。

現代社会において、テイヤール・ド・シャルダンがいうところの発達の極致としてのオメガ点に集合規模で到達するのは夢物語であるかのようだ。現代人にとっての様々な宿痾が山積みになっている。それらの病同士が影響を与え合い、さらに巨大な病を生み出している。

実家に戻って来たときと同様に、新幹線が止まる徳山駅まではローカル線を使う。実家にやって来たときの車内で、スマホの画面をじっと眺め、周りの友達たちと話をしようとする高校生の姿が奇妙に映ったことを覚えている。もちろん私たちの頃と時代が違うのだが、私が中高生の頃は、電車の中では絶えず会話がそこにあつたように思う。もちろん沈黙もありながらも、そこには肌触りのある確かなコミュニケーションがあつた。今の中高生たちのコミュニケーションのあり方や仕方は、自分

の時代のそれらとは随分と変化している。彼らの現在のコミュニケーションが今後の彼らをいかなる人間にしていくのかは定かではないが、私がそこに光を見出すことは難しかった。

学校でしか通用しないような知識や立ち居振る舞い、会社の中でしか通用しないような知識や立ち居振る舞いばかりを身につけてどうするのか。また、学校であれ、組織であれ、そこでは「隠れたカリキュラム」に従って学習や実践が遂行されがちであることについて考えていた。後者に関して言えば、隠れたカリキュラムというのが一概に害のあるものではなく、むしろ隠れたカリキュラムを通じてしか学べないことも多い。それは暗黙知的なものである。しかし往々にして、学校や会社の中では、人の可能性や自由を抑圧する類の隠れたカリキュラムが蔓延っている。それをいかに客体化していくか。客体化を怠れば、その餌食になる。

創造性や発展学習、さらには人格的成熟などの抑制につながる隠れたカリキュラムは、当然ながら社会にもある。これからも引き続き、いかなる隠れたカリキュラムがこの社会に潜んでいるのかを観察し、それを明るみにしていこう。山口県光市:2020/10/15(木)04:38

6329.【京都滞在記】京都に到着して

時刻は午後8時を迎えようとしている。今、京都のセンチュリーホテルの自室にいる。

今、どこか不思議な精神状態に置かれている。確かに自分はここにいるようなのだが、ここにいるのが果たして自分なのか分からないような感覚がある。精神はとても落ち着いているのだが、それが変性している。

先週の今頃はまだオランダにいたのだ。いや、ちょうど今日が出発の日だったか？ああ、明日が出発の日だった。昨日まで、約1週間ほど山口の実家に滞在した。オランダから山口県へ。そして京都へ。物理的に大きく環境を変えることがどれほど精神を変容させるだろうか。誰もそれを大なり小なり経験したことがあるだろう。環境変化がもたらす精神変容。適応も早ければ、変化も早い自分がいる。

思考は深く1つのことに集中することができながらも、それはどこかに飛んでいく。そして拡散していく。流れ星がある地点に向かって流れるかの如きの集中度合いがありながらにして、星は散る。光

は凝縮して光線となり、光はどこかに散る。自分は凝縮して、自分は拡散する。そして再び凝縮した形で自分は戻ってくる。

今宿泊しているホテルの自室はちょっとした宮殿のようだ。西洋風の宮殿のようであり、風呂場には銭湯のようなタライと椅子が付いている。このような風呂が自室にあるホテルにこれまで1人で宿泊をしたことがないかもしれない。

午後4時過ぎにホテルに到着して館内に入った時、外見からして立派だったが、中に入って雰囲気がとても良いことに対して嬉しい驚きがあった。チェックインを済ませて部屋に到着すると、そこにはバスタブがなかった。予約の段階で確認をすることを怠っていたのである。まさかバスタブがないとは思っていなかったため、夕食を京都駅構内の成城石井で購入するがてら、2Fの受付で部屋を変えてもらうことができないかをお願いした。すると嬉しいことに、すぐさま部屋を変えてもらうことができた。

新しい部屋は、予約をした部屋よりも広く、そしてバスタブだけではなく、風呂桶と椅子が付いている部屋に変えてもらうことができて幸運であった。部屋を快く変えてもらった際に、レセプションの方にお礼を述べた。とても感じの良いレセプションの男性とお互いに笑顔で2、3言葉を交わせたことがとても嬉しい。

成城石井に立ち寄って、新鮮そうな2つの野菜サラダと豆乳を購入した。ちょっとカカオが欲しかったので、99%のカカオチョコレートを購入した。そこでも1つ嬉しかったのは、レジの店員の女性の方と目が合ったことである。オランダでは当たり前な目を合わせるという行為が日本では意外と難しい。店員の女性の方とのやり取りもまた気持ちを明るくしてくれた。

その後、水だけはコンビニで購入しようと思い、ホテルからすぐ近くのファミマに立ち寄った。やたらと人間同士のコミュニケーションが起こる。2Lの水が2種類あったので、私はそのどちらにするかを成分表示を睨めつけてこして比較をしていた。ポイントはマグネシウム含有量とpHの値である。

今日は実家からアルカリイオン水を水筒に入れて十分に飲んでいたので、コンビニでは中性の水を購入することにした。水を選んでいるときに、1人の女性が水のコーナーにやって来て、私は2つのうちのどちらの水を購入するのかについてしゃがみ込んで考えていたので、その女性は私が水を

選ぶのを待っていてくれるように思えた。私はすぐに立ち上がり、お先にどうぞと述べると、その女性にお礼を言われた。こうしたコミュニケーションがあることがとても嬉しかった。

昨年、東京の銀座のコンビニで、同じく水を購入したとき、店員とは一切目が合わなかった。そしてこれは東京のコンビニだけではなく、残念なことに、実家のすぐ近くのコンビニでも昨年店員と目が全く合わないということがあった。これは憂うべき事態だと思っていたが、先ほどの京都のコンビニの店員の男性の言葉は、コミュニケーションがきちんと成立する話し方であった。それもまた自分を嬉しくさせてくれた。今日はそうした一連の嬉しいことが続いていた。コミュニケーションを取れる人間がまだいるということ。それは何か救いのような喜びをもたらした。

地獄の中にも泉あり。自らの人間性を内省し、自分の世界認識を改めて考えさせてくれるような1日でもあった。京都:2020/10/15(木)20:24

6330.【京都滞在記】京都滞在2日目の計画

時刻は午後6時を迎えた。京都滞在の2日目が始まった。

昨夜は、ホテルの自室で『あゝ、荒野 完全版』という日本ドラマを見ていた。これは、詩人かつ劇作家である寺山修司の小説が原作になっている。欧米での9年間の生活の中で、日本ドラマは一度も見ることがなかったのだが、現在様々な映像作品を見ていることもあり、面白そうな日本ドラマにまで鑑賞の範囲を伸ばしている。

昨日は結局3話まで見た。この作品は、ボクシングをテーマに置いているが、格差、虐待、自殺、人種差別などの社会問題も織り込まれていて、社会の負の側面を考える上でいくつもの視点を与えてくれる。本作においても日常や非日常が背後のテーマとして隠されているように思えた。今夜もまた、観光からホテルの自室に戻って来たら続きを見たい。今日は最後まで全部見れるかもしれない。

今朝方は印象的な夢を見ていたが、もうその記憶はない。日本に帰って来てからは、夢を見ていたとしても夢を覚えていることがほとんどないのは不思議なことである。それはオランダ以上に快眠が取れている証なのか、はたまた別の理由なのだろうか。そのあたりは謎である。

今朝方の夢の感覚としては、興奮があったように思う。その感情が自分の内側にまだ残っている。今日はちょうど、夢日記を書き続けた明恵上人ゆかりの地を訪れるので、何かが変わるかもしれない。

本日の予定を書き留めておくと、午前8時ぐらいからホテルのレストランに行き、そこで朝食を食べる。昼食は食べず、夜を軽くするために、朝はしっかりと食べておこう。いつもは朝はほとんど何も食べず、果物ぐらいだが、これは旅行中の食事スタイルである。朝食をしっかりと摂るが、トータルで言えば1.5食ぐらいだろうか。

朝食後、今日はまず、細見美術館に行き、葛飾北斎や伊藤若冲の作品を見にいこうと思う。一昨日に実家の近くの書店で葛飾北斎に関する特集雑誌を購入し、そこにこの美術館が紹介されていた。所蔵されている作品にとっても関心があったので、早速足を運んでみることにした次第である。京都では東洋の美を味わうことをテーマにしていたので、細見美術館の訪問はその一環である。

美術館を訪れた後は、ゆったりとバスに乗って、高山寺に向かう。自然との調和を説き、夢を書き留め続けた明恵上人から得るものは多いだろう。明恵上人は、和歌を詠う創作人でもあった。そんな明恵上人から何かしらの靈感が得られる気がしている。仮にそれを顕在意識下で察知できなかったとしても、無意識下でそれを察知しているに違いない。

明恵上人について調べてみると、明恵上人の教えは、華嚴を基礎としながらも、華嚴と真言密教を融合して嚴密(ごんみつ)と呼ばれる独自の宗教観を打ち立てたことを知った。この宗教観がいかなるものであるかもさらに調べてみたいと思う。高山寺に関して言えば、ここは日本で初めて茶が作られた場所として知られているそうだ。歴史を辿ると、栄西禅師が宋から持ち帰った茶の実を明恵上人に伝え、山内で育て始めたことがきっかけのようだ。そのような歴史があるとは知らず、それを知って、また少し自分の世界が動き出した。京都:2020/10/16(金)06:17

6331.【京都滞在記】細見美術館と高山寺を訪れて

時刻は午後7時を迎えた。京都の滞在2日目が見事にゆっくりと終わりに近づいている。

今日は午前中から観光に出かけ、まずは細見美術館に足を運んだ。ちょうどこの時期は細見コレクションとして、琳派と伊藤若冲(1716-1800)の特別展示がなされていた。この美術館を訪れたのは、以前より伊藤若冲の作品に関心を持っていたこともあり、ぜひ若冲の作品を実際の手で見たかったからである。若冲の描く作品には、どこか生命の躍動を感じることができる。

若冲は、40歳以降から本格的に絵を描き始めてあの境地に達した。葛飾北斎が「画狂人」であるならば、若冲は「画遊人」であるという形容が納得できるかのように、若冲の絵にはどこか遊の世界が漂っていた。そうした世界の中で創作活動に従事し続けることができたらどれほど悦であろうか。

美術館には若冲以外にも作品が展示されていて、その他に印象に残っているのは、中村芳中(1790-1819)の作品だ。中村芳中の作品はとても愛らしく、ほのぼのとした気持ちにさせてくれる。とても丸みと温かみのある作品たちに癒された。細見美術館はこじんまりとしていたが、私が求めるような日本の美を感じさせてくれる優れたコレクションが多々あった。琳派というのはこれまで歴史の教科書を通じて習ったことぐらいしかなかったが、琳派の代表でもある俵屋宗達や尾形光琳の作品を実際に見ることができたことは幸せであった。

おそらく彼らの作品の本当の良さがわかるまでに、随分と時間がかかるだろう。彼らの作品の美を汲み取るほどの内的成熟度合いが今の自分にはない。ここからまたゆっくりと歩みを進めていこう。そのようなことを思いながら美術館を後にした。

その次に向かったのは、京都の西にある高山寺である。細見美術館からバスで高山寺に向かった。道中、京都の市内からどンドンと郊外に向かっていく際に現れる景色をぼんやりと眺めていた。バスに揺られること50分。目的の梅尾のバス停に到着した。高山寺は、名前の通り、山の中にあり、バス停に降りた時の空気はとても清々しかった。

表参道ではなく裏参道から入り口に入っていく、そこで入場料の500円を支払った。その後、石水院を拝観する前に、寺の中のその他の建物や景色を味わうために敷地内を散歩した。

森の声。森そのものの声と、森に住む様々な生命たちの声が自分の内側に沁み渡って来た。そこに大いなる安らぎと癒しがあった。人は自然の中に入ると大きな癒しをもたさられるというのは本当

である。自然とつながることによって、大いなる存在ともつながることができる。その瞬間に大きな癒しをもたらされる。

高山寺上空の青空をぼんやりと眺め、涼しげな秋の風が頬を伝っていった。自分はこんなところで何をしているのだろうか？と思った。生きているのだ。ただ我が身そのままに、己の生命時間を生きているのだ。ただそれだけがそこにあり、それが自分そのものであり、この固有なる人生そのものだと思った。

高山寺に向かうバスの中、思わず笑みがこぼれた。自分にはこの世界に居場所がないのではなく、この世界の全てが居場所であると知ったからである。

2度と住むことのない母国に対する愛慕の気持ち。それは欧米での生活が積み重なれば積み重なるだけ膨れ上がっていく。

気がつくとは私は、高山寺の金堂から茶園に向かう道の途中にいた。そこに巨大な切り株があった。私は思わず切り株に手をかけ、話しかけた。その時に、お互いの生命エネルギーを交換することを行った。まずはできるだけ私から切り株にエネルギーを与えた。その後、切り株からエネルギーを分けてもらうというのは申し訳ないと思ったので、エネルギーの交換は、近くにあった生きた大木と行うことにした。

深い山の中に何か特別な気配があった。目では見えない何かがある感じがし、それに対して挨拶をして、そこから石水院に参拝しに向かった。そこで『明恵上人樹上座禅像』『仏眼仏母像』『鳥獣人物戯画絵巻』『子犬』をゆっくりと鑑賞した。

とても穏やかな時間。とても静かな空間。そして平穏な自己がそこにあった。今夜はひよつとすると、40年間夢日記を綴り続けた明恵上人の力を借りて、何か良い夢を見るかもしれない。京都:2020/10/16(金)19:49

6332.【京都滞在記】延暦寺訪問に向けて

時刻は午前5時半を迎えた。今、シトシトとした雨が降っている。

振り返ってみれば、一時帰国してすでに10日ほど経ったが、雨が降っているのは初めてかもしれない。関空に到着した時には雨が降っていたが、それも時期にすぐに止んだので、1日を通して雨が降る時間帯が多いというのは確かに初めてのことである。

今日はそうした雨の中、お隣の滋賀県に行き、比叡山延暦寺を訪れる。鞍馬山と延暦寺のどちらを先に行こうか迷い、天気の良い明日に鞍馬山に行きたい。延暦寺以上に鞍馬山の方が歩くだらうと思ったからである。調べてみると、京都駅から延暦寺のバス停まで直通のものがあつたので、それに乗ろうと思う。時間にして1時間10分ほどのバスの旅だ。バスの路線を見ると、これまで通つたことのないような道なので、是非ともその景色を味わいたいと思う。

昨日も少し肌寒かったが、今日は一段と冷え込む。最高気温は17度、最低気温は12度、それに雨なので、今日は長袖を来ていこう。それに加えて、ユニクロで買ったスポーティーなパーカーも携帯しておこうと思う。昨日は午後まで半袖で活動していたが、人口の0.5%未満しか半袖を着ていなかった。観察した限り、昨日出会った全ての人たちのうち、半袖を着ているのは私以外に2人だけだったのでそれぐらいの統計割合になるだろう。さすがに今日は半袖で過ごすことはできず、むしろ長袖の上に何かを羽織つた方がいいぐらいなので、気をつけよう。日本に滞在するのはまだ2週間以上あるので、風邪など引いてはならない。

今日も朝食をゆっくりと摂り、ホテルを10時15分ぐらいに出発しようと思う。延暦寺に到着したら、まずは東塔の根本中堂を参拝し、その後西塔に歩いて移動する。西塔では、にない堂と釈迦堂を参拝しよう。1000円で購入できる延暦寺の周遊券には、東塔・西塔意外にも横川巡りも付いているのだが、そこへは歩いて行けないようなので—30分に1本の有料(600円)シャトルバスがあるが—、今回はそこに行くことはやめようと思う。どれだけゆっくりと時間を過ごすか分からないが、早ければ午後3時過ぎのバスに乗り、遅ければ午後4時過ぎのバスに乗って京都駅に戻ってこようと思う。京都:2020/10/17(土)05:52

6333.【京都滞在記】種々の統合に向けて

改めてふと思ったが、今回の一時帰国は様々な統合の試みにつながっているように思った。何かそれほど強く意図したわけではないが、今回石川県と福井県を訪れるのは、父方の加藤家(下り藤

の家紋)と母方の加藤家(上り藤の家紋)のゆかりの地に行き、両家の統合を自分の中で行うきっかけを作るためであった。今日は最澄にゆかりのある比叡山に行くが、今からちょうど1週間後には空海にゆかりのある高野山に行く。ここでも最澄と空海を自分の内側で統合する形で自己を深めようとする見えない衝動を感じる。

昨日に、明恵上人ゆかりの高山寺に訪れたことは、夢を探究し続けた明恵上人の叡智を汲み取り、自分の夢と自己とをより深く統合するためだったと言えるかもしれない。明日に訪れる鞍馬山においては、これから起こる自己の諸々の統合を支えるための霊的エネルギーの活性化がもたらされるだろう。これはさほど意識していたことではないが、通称パワースポットと呼ばれるような場所にふらりと出かけていく自分がいるのは、再び欧州に帰った後にやってくる種々の統合に向けた準備と自己涵養なのだと思う。

時刻は午前7時を迎えた。窓の外を見ると、うっすらとした雨雲が空を覆っている。幸いにも今日の雨は小雨のようだ。大雨だと比叡山の観光は難しくなってしまうが、これくらいの雨だとほとんど問題ないだろう。ここから少しばかり作曲実践をし、昨日細見美術館で購入した伊藤若冲に関する特集雑誌を読みたいと思う。朝食を摂るためにレストランに向かうのは午前8時過ぎにしよう。

昨日は和食を注文したが、今日はベジタリアン向けの洋食を注文しよう。現在のコロナ下においては、残念ながらどこのホテルもビュッフェ形式で朝食を食べることができない。昨日気づいたが、和食よりも洋食の方が注文してから食事が届くまでの時間が短い。とは言え、待ち時間があることは確かなので、今日はレストランに本を持って行こう。

今日からは、西部邁先生の『保守思想のための39章』を読む。結局、京都では映画館に行くことをせず、大型書店に行くこともしないことにした。前者に関して言えば、確かに現在上映中の映画の中でいくつか見たいものがあるのだが、映画よりも名所巡りを優先し、映画はホテルの自室でU-NextやAmazonプライムで見ることができる。昨日は、細見美術館と高山寺から帰って来た後に、「あゝ、荒野<完全版>』と『だれかの木琴(2016)』を見た。今日もまた、何かしらのドキュメンタリーか映画を夜に見ようと思う。

京都で大型書店に行く代わりに、京都駅の中にある小さな書店に昨日立ち寄った。実家の近くの本屋で行ったのと同様に、その本屋でも、漫画や辞書などを含め、基本的に全ての本と雑誌の背表紙を眺めていった。すると、いくつか関心のある書籍や雑誌を見つけ、それらをパラパラと眺めていったが、結局、購入したいと思うようなものはなかった。今のところの計画としては、21日の日に東京から大阪に早めに移動し、大阪梅田での宿泊先は昨年と同じであり、ジュンク堂が目と鼻の先にあるので、夕食を抜く形で午後から夜まで書籍を吟味しようと思う。

あと少しばかり和書で購入したいものがあり、それがあれば嬉しい。書籍以外にも、政治学と社会学の日本語の辞典で何かいいものが置いてあれば、それを購入することも検討したい。京都:2020/10/17(土)07:18

6334.【京都滞在記】書店を訪れて/テロメアと境界知能

時刻は午後3時を迎えようとしている。今現在、京都では雨が降っている。秋のシトシトとした雨は風情があるが、今日は肌寒い1日である。

今私はホテルの自室にいる。結論から述べると、今日は結局比叡山に行かなかった。実際には、予定よりも早くホテルを出発し、比叡山行きのバス停に向かった。ところが、地図上に表示されているところにバスがやって来なかったのもので、そこからバスを探すのを止め、京都駅前のAvantiというデパートに行き、その6階の本屋に向かうことにした。

本屋の書籍の品揃えはなかなか素晴らしく、丸善に行く必要はなかった。そこで社会学と哲学の用語集を購入した。政治学に関する用語集はなかったが、それら2つの用語集を購入できたことは幸いであった。昨日も京都駅構内の書店で長い間立ち読みをしていたが、今日もまた3時間ほど様々な書籍を眺めていた。地政学に関する書籍の購入も迷ったが、それは今度でいいだろう。

大阪と東京で宿泊するホテルの目と鼻の先には丸善があるので、両都市に滞在する時にそれらの書店に足を運び、政治学に関する辞典と用語集を確認し、作曲関係の書籍も何か良いものがないかを探してみようと思う。

今回は1ヶ月弱ほどの旅行であるから、観光疲れをしないように注意し、今日のようにどこかに観光に出かけることなく書店にぶらりと訪れてみる日があってもいいと思う。実際に、そのおかげで今日は良書に出会えたのだから。

オランダを離れて10日ほど経ったところで、英語の学術書を読むことへの飢えが芽生えている。それはもう強い欲求であり、その欲求を抑えるのは難しいほどである。やはり日本に10日もいると、思考空間内で日本語を操作する時間が長くなり、また心身共に周りには日本語ばかりであるからかもしれない。欲求を満たすためには硬質な学術書の英語が必要であるから、あまり効果はないと思ったが、少しでも欲求を満たすために、本屋に置いている英語の書籍を眺めてみた。挙げ句の果てには大学受験の英文読解の書籍などにも目を通していった。結局、それほど欲求は収まることはなかったが、逆にこうした飢餓感が探究にとって必要なのだと思う。

今は旅行中でもあるから、創作活動の量も減っていて、創作に対する飢えも醸成されている。こうした飢えは、探究と創作をまた1つ違う次元に運んでくれる必須のものかと思われる。英語の学術書を読めないということと、創作活動の量を減らしていることは、ある種の断食のようである。こうした断食の効果が実感されるのは、オランダに帰ってからになるだろう。

本日書店で立ち読みをしているときに、細胞の染色体の端にあり、「命の回数券」とも言われるテロメアに関する書籍を読んでいた。どうやら日々の自分の生活習慣(食事や運動、さらには精神のあり方など)は、テロメアを伸ばすことにつながっていることがわかった。また、別の書籍の中で、「境界知能」に関して説明がなされていて、それについて思うことがあった。境界知能の人たちは、知的障害(IQ69以下)ではないが、IQがおおよそ70~84ほどの、読み書き計算などの学習や、運動や手先の器用さなどに困難を抱えるということを知った。その割合は、人口の約14%ほどのことであり、その割合の多さに驚いた。

成人発達理論やインテグラル理論などを学んでいると、その背後にある上昇志向的な発想ゆえに、こうした生物学的に知能の発達が難しい人たちがいることを忘れてしまいがちであるが、サイコパスやソシオパスの人々と同様に、こうした境界知能の人たちの存在を踏まえて議論や実践をしていくことを忘れてはならないと思う。京都:2020/10/17(土)15:20

時刻は午後4時を迎えた。まだ雨がシトシトと降っているが、明日は天気が良くなり、気温も随分と上がるようだ。

本日書店に足を運んだときに、詰将棋の本と、大学受験用の数学の問題集を眺めていた。日本に帰って来て書店に立ち寄ると、どちらの書籍もついつい手を伸ばしたくなる。立ち読みしながら詰将棋の問題を考えたり、受験数学の問題を考えたりすることがどうやら好きなようだ。だが今日は、誰かが作った問題に答えようとする愚かさを思った。詰将棋や受験数学の問題の解き手に回るのでなく、自らが問題を作り、自らで問題を解いていくこと。そちらの方が遥かに重要で、遥かに面白いということを改めて思った。

本日購入した社会学と哲学の用語集をもとに、自ら問題設定をして、その問題に自ら答えていくこと。それに加えて、創作活動というのは、自分で問題設定をし、自分でその問題を解決していく営みであることを改めて思った。

つい先ほど、『ちいさな哲学者たち(2010)』というフランスのドキュメンタリーを見た。このドキュメンタリーは、フランスのとある幼稚園で始まった世界で初めての、子供が行う哲学の授業を映し出している。4歳から5歳にかけてこの哲学の授業が行われたらしく、彼らの成長ぶりには目を見開かされるものがあった。特に印象に残っているのは、自由をテーマに議論をしているときに、5歳ぐらいの小さなアフリカ系フランス人の女の子が、「自由とは、ちょっと独りになれること。そして、息抜きができて、優しくなれること」と述べていたことである。

さあ、現代人はどうだろうか。どれだけの人が独りの時間を持っているだろうか。しかもその独りの時間とは、孤独死につながるような否定的なものではなく、自らの肥しとなるような肯定的かつ積極的な孤独の時間である。そして、息抜きや優しさについても、この小さな女の子の主張からは考えさせられることが多い。子供たちの自由に関する議論を聞いていると、彼らは、現代社会が自由と規定しているものの限界や自由の相対性に気づいているようだった。

子供たちがいよいよ卒園をし、小学校に入学する時期になり、最後の授業として、考えることの大切さが改めてのテーマとなった。そのテーマに対して、アジア系のフランス人の女の子が、「私は考え

るのが好き。だって、考えることと夢を見ることは似ているから」と述べた。考えることと夢を見ることの類似性。それはとても洞察に溢れている。その発想は自分にはなかった。

思考するというのは夢を見ること、夢を見ることは考えることと密接につながっているのかもしれない。思考することも夢を見ることも、どちらも共に想像性と創造性が鍵を握る。現代人の想像性と創造性は仮死状態であり、そうした状況においては、思考することも夢を見ることもままならないのだろう。しかし、そうした仮死状態を治癒する道はある。京都:2020/10/17(土) 16:25

6336.【京都滞在記】鞍馬山の訪問に向けて/今朝方の夢の断片/ハイパー・メリトクラシーの到来について

時刻は午前3時半を迎えた。日本に一時帰国してからは基本的に起床時間は安定しており、大体3時半から4時半の間に起床している。こうした時間に起床することによって、朝の時間がとても有意義に活用できていて、1日が充実感と共に終わっていく。今日もまたそうした日になるだろう。

今日は、京都随一のパワースポットと呼ばれる鞍馬山に足を運ぶ。朝食を摂るために、午前8時過ぎにレストランに行き、そこでゆっくりと朝食を味わう。1時間ぐらいかけてゆっくりと朝食を摂ったら自室に戻り、そこでまた少しばかり読書でもしようと思う。昨日購入した3冊の用語集をざっと読み通しておきたい。

鞍馬山に向けての出発は、午前10時前となる。今日は昨日とは異なり、きちんと目的地に辿り着けそうだ。昨日は、比叡山行きのバスが停まる場所がよくわからなかったが、今日はまず最初に京都駅から電車に乗り、国際会館駅で降りて、そこからバスに乗ればいい。このバス停は分かりやすそうなので、今回は問題ないだろう。

高山寺と同様に、鞍馬山でも山の気を分けてもらおうと思う。マルセル・モースの社会発達論の観点を敷衍すれば、エネルギーを贈与してもらったからにはきちんと返礼をしようと思う。鞍馬山から単にエネルギーを分けてもらうのではなく、こちらの気も返していこう。それによって、鞍馬山のエネルギー体も自己のエネルギー体もさらに相互発達をしていこう。

一昨日に、明恵上人ゆかりの高山寺に足を運ぶことによって、夢の世界に何か変化があるかと思っただが、さほど変化がない。今朝方も確かに何かしらの夢を見ていたのだが、それほど覚えていない。覚えていることがあるとすれば、感覚的に幸福感をもたらすものであったということだ。そして、主要な登場人物としては、見慣れない女性が出ていたことを覚えている。

時代の雰囲気が人の肉体や精神に与える影響について昨日考えていた。エートスというのは確かに時代や社会といった大きなものに備われる集合的意識や慣習を指すのだと思うが、もっと小さな単位で考えることもできるだろう。1つの県や1つの組織など、そうしたところにもエートスがある。

昨日考えていたことの続きとして、境界知能、ソシオパス、サイコパスの人たちがこの社会には一定数存在しているにもかかわらず、彼らの存在を抜きにして、対話力や人間力などの新たな能力を求めようとするハイパー・メリトクラシー(超・能力主義)の時代が到来していることについて考えを巡らせる。

境界知能を持つ人たちにとっては、ハイパー・メリトクラシーは過酷であり、一方でソシオパスやサイコパスの人間は社会が求める能力をうまく高め、社会の中で評価されるポジションを構築していくに違いない。その結果として、前者の人々は社会が要求する新たな能力を獲得することができずに虐げられ、後者の人間たちは評価され、諸々の格差が拡大していくのではないかと危惧する。社会は今後どのようなようになっていくのだろうか。京都:2020/10/18(日)03:57

6337.【京都滞在記】フィンランドへ繋がる道/写譜と伊藤若冲/道具的理性の反乱

時刻は午前4時半を迎えようとしている。ちょうど今、風呂から上がって来た。やはりシャワーではなく浴槽がある部屋に変えてもらって良かったと思う。いくらシャワーを浴びても、芯から体を温めることは難しく、リラックス効果も浴槽に浸かる時と随分と異なるため、浴槽に浸かることは自分の日常には欠かせない。

オランダにいる時は、夜にしか浴槽に浸からないが、旅の最中は朝にも浴槽に浸かるようにしている。それによって、血流を良くするだけでなく、心身をゆつくりと目覚めさせ、1日の活動に向けた準備をするようにしている。幸いにも今日は天気が良いようなので、鞍馬山を巡るにはうってつけ

だ。朝食を摂るまであと4時間弱あるので、その間は創作活動と読書に取り組みたい。旅をして、日記を執筆し、絵と音楽を作ること。それが自分の日常となり、人生となった。

おそらく本日に鞍馬山を訪れた際にも感じると思うが、先日高山寺を訪れた際に、山や森の中で暮らすことに対してより一層強い思いを持つようになった。明恵上人のように、山や森の中で暮らすこと。贅沢を言えば、そこに川か湖のようなものもあれば理想である。こうした想いは、フィンランドにつながっている。

昨年神保町の音楽書の専門店である古賀書店で購入した楽譜のうち、フィンランド人の作曲家のセリム・パルムグレン(1878-1951)とレーヴィ・マデトヤ(1887-1947)の楽譜をオランダに持って帰ることにした。その他にもまだ随分と楽譜が実家に置いてあったのだが、結局彼ら2人の楽譜だけを今回持って帰ることにしたのである。この行動の背後にもまた、フィンランドを求める自分の一端が垣間見える。

一時帰国中はなかなか写譜の実践ができないが、オランダに戻ったら、また旺盛に写譜をしていこう。一昨日に細見美術館を訪れた際に知ったのだが、キャリアの初期において、伊藤若冲も模写を懸命に行っていた。中国画を1000枚以上模写することによって古典を学んだという話がとても印象に残っている。若冲は仮に模写をしても、最終的には自分の絵としてそれをものにしてしまう独創性があった。自分もまた模写を通じて、模写の対象を我ものとし、それを超えていくようにしていきたい。

昨日は、理性と現代の方向性について考えていた。何かの目的を達成するためだけに理性を働かせようとする現代の風潮に危険性を見る。それはまさに、ホルクハイマー、アドルノ、ベンヤミン、フロムなどのフランクフルト学派が警鐘を鳴らしていたことである。端的には、批判理論を提唱する彼らフランクフルト学派は、近代以降のヨーロッパの理性が、何らかの目的を達成するための道具として用いられて来たことが全体主義やナチズムを生んだと分析した。そうした道具的な理性は、視野が狭く、多面的に物事を考えることができず、いとも簡単に経済的・政治的な枠組みに取り込まれてしまう。現代の理性のありようを見ていると、全体主義やナチズムを生んだ当時とさして変わらないのではないかと思えてくる。その結果として、全体主義やナチズムのようなものをまたしても招いてし

まうのではないだろうか。あるいは、それらに変わるより悲惨な主義や運動を招いてしまうことが起こり得るのではないかと思えてくる。

理性のありようを見つめるために理性を働かせることもまた道具的理性がなすことなのだろうか。そうであったとしても、より高次元の観点から理性を見つめることは大切だろう。また、理性ではなく、感性を通じて理性を見つめ直していくこと、さらには歪んだ理性を治癒していくことが現代では強く求められているに違いない。そうでなければ、道具的理性は高度に発達したテクノロジーと病理的な社会の精神と結託し、暴走してしまうだろう。京都:2020/10/18(日)04:38

6338. 【京都滞在記】鞍馬山を訪れて

時刻は午後3時半を迎えた。先ほど、鞍馬山の訪問からホテルに戻って来た。

幸いにも今日は天気が良く、鞍馬山を観光するにはうってつけであった。気温は少々肌寒いぐらいであり、鞍馬山を歩くのにはそのぐらいの気温がちょうど良かった。

京都駅から鞍馬山までは思っていた以上に近く、移動で疲れることはなかった。その分、鞍馬山を歩いて回る事ができたように思う。端的には、先日訪れた高山寺同様に、鞍馬山のエネルギーを思う存分に味わう事ができた。鞍馬駅でバスを降り、そこから仁王門に向かった。門内へ一歩踏み込むと、そこはもう鞍馬山の浄域であり、聖なる感覚が身を包んだ。

そこからは歩いて本殿を目指した。本殿にはかの有名な六芒星のパワースポットがあり、そこでしばし佇んで、自己を超えた世界に対して想いを寄せていた。

本殿の中で、鞍馬山に関する小冊子ほどのガイドブックを購入した。そこには霊性学的な観点で大変興味深いことがいくつも書かれており、ぜひ手元に置いておきたいと思ったのである。このガイドブックに記載されていたことにはついては追々日記の中で言及していくことになるだろう。本殿を後にすると、そこからは霊宝殿、魔王殿を通って行き、貴船神社を終着地点とした。

鞍馬山を登山する最中は、気がとても落ち着いていて、尚且つ気が自分の内側に充満している感覚があった。明日からは2日間ほど東京に滞在し、明後日には対談講演会があるが、神聖なエネル

ギーに身を纏って対談に臨めるだろう。今日はこれから返信が必要なメールに返信し、読書をしてから夕食を摂る。夕食後には、1件ほどオンラインミーティングがある。

そう言えば、以前、明恵上人のことを中国の高僧と述べていたが、今回明恵上人ゆかりの高山寺を訪れ、その後色々と調べていると、明恵上人は和歌山県出身の日本人であることを知った。明恵上人が中国の高僧だと思っていたのは一体何の誤解だったのだろうか。

昨日ふと、自分はアメリカの社会学者ロバート・パークがいうところのマージナルマン(辺境人)の性質を持っていると思った。マージナルマンとは、どこの文化圏にも属することなく、一貫したアイデンティティを持たない者を指す。彼らは文化的なアイデンティの確立に困難を覚えるが、様々な文化の辺境に位置している分、多様な文化を客体化することができ、時に創造的な事をなす。

今回一時帰国をしている最中において、継続的にマージナルマンの感覚が自分を包んでいる。そうした中で、職業を旅人とするのは少し難しいかもしれないということをふと思った。現在旅を続けているが、旅の最中においては、どうしても創作活動や読書が疎かになってしまう。旅から得られる刺激や感覚は貴重であるが、旅をずっと行うことは自分にとって好ましくない。旅は程々にして、探究活動と創作活動という自分の天職に集中していこうという思いを新たにす。京都:2020/10/18

(日)15:44

6339.【京都滞在記】今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えた。今日は京都を出発し、東京に向かう。

明日はとても楽しみにしている対談講演会がある。今日もまたゆっくりと朝食を摂り、午前10時前にホテルのチェックアウトをしようと思う。10:24の新幹線に乗れば、12:36に東京駅に到着する。東京駅の構内でお土産と今日の夕食を購入し、ホテルに向かう。

今日から宿泊させていただくホテルは、先日「フォーブストラベルガイド2021」で5つ星を獲得したザ・プリンスギャラリー 東京紀尾井町である。明日の対談講演会は、同じ敷地内の赤坂プリンス クラシックハウスで行われる。今から明日の対談講演会がとても楽しみであり、東京駅に向かう新幹線

の中では、対談講演会に向けた資料の最終確認をしていこうと思う。資料の最終確認は、ホテルに到着してからも行い、明日にもまた行おうと思う。

日本に滞在中はあまり夢を見ていないのだが、今朝方は印象的な夢を見ていた。夢の中で私は、小学校時代に在籍していたサッカークラブのメンバーと一緒に大会に出場していた。ちょうど、近くのサッカークラブと試合をすることになっていた。そのクラブには、同じ小学校の友人も数名ほどいた。彼らは住んでいる家の場所のため、そちらのクラブに入っていたのである。

試合前、監督は私にベンチスタートを命じた。普段はスタメンで出場しているため、私はなぜ自分がベンチスタートなのか監督に尋ねた。正直なところ、ベンチスタートはかなり不服であった。監督曰く、ここ最近の練習に取り組む姿勢が良くないからということだった。私としてはこれまでと変わらない姿勢で練習をしているつもりだったが、確かに少しばかり横柄に映るような態度で練習をしていたかもしれないと思った。

試合がいざ始まると、相手チームに所属している同じ小学校の友人(TK)が、開始早々から積極的にドリブルを仕掛け、こちらのゴールを脅かした。彼は小柄なのだが、テクニックが凄かった。最初に彼がグラウンダーのシュートを放ったとき、こちらのチームのキーパーが見事にキャッチをした。普段は、キーパーを専門とする友人がキーパーを務めているのだが、今日は小柄な友人(YU)がキーパーを務めていた。

私は彼がシュートをキャッチした時、それを称える声掛けをベンチからした。すると、彼はにこやかに笑みを返した。そこから試合は硬直状態となり、相手チームは前半の途中で早々と3名ほどメンバー交代をした。一方、こちらのチームはメンバー交代をせず、私は早くピッチに立てないかどううずうずしていた。

相手チームでメンバー交代となった選手たちは皆私の知り合いであり、ベンチに引き上げてきた彼らは、「あれっ？今日はベンチスタート？それにしてもこの間の試合のシュートは凄かったよ」と声を掛けて来てくれた。そう言えば、先日の試合では、ハーフラインぐらいのところからシュートを放ち、それがゴールに決まっていたことをふと思い出した。その記憶が蘇り、仮に今日試合にこれから出場したら、同じようなシュートを決めてやろうと意気込む自分がいた。

私は痺れを切らし、監督を無視する形で、ベンチからピッチに立っているメンバーに声を掛け、交代したい人はいないかを確認した。すると、何名かのメンバーがすでに疲弊していたので、彼らのうちの1人と交代した。ピッチに立った私は、気持ちの高揚と喜びを全身に感じており、これからひと暴れしてやろうと意気込んでいた。ピッチに立つと、すぐさまボールが自分のところにやって来たので、ゴールまで相当距離があったが、そこから思いっきりシュートを放ち、見事にゴールに決まった。そこで雄叫びを上げたところで夢から覚めた。京都:2020/10/19(月)04:27

6340.【東京滞在記】東京に向かう新幹線の中で

時刻は午前11時を迎えた。今、東京行きの新幹線に乗っている。当初の予定では、午前10時半あたりの新幹線に乗ろうと思っていたのだが、予定よりも早くホテルのチェックアウトをし、結局午前9時半過ぎの新幹線に乗った。そうしたこともあり、あと30分ほどで東京駅に到着するだろう。東京駅に到着したら、今夜の夕食用のサラダでも購入したい。また、明日以降にお会いさせていただく協働者の方々へのお土産も購入しておこう。

ふと、先日までの実家での滞在について思い出す。バルコニーから見渡す瀬戸内海の素晴らしい眺めを思い出す。自室にいる時に、愛犬が「開けてよ、開けてよ」とドアを足で擦るので、部屋に入れてあげたことを思い出す。愛犬は部屋をちょっとだけ探検してまた部屋の外に出て行った。その時の愛犬の後ろ姿が脳裏に焼き付いている。

そろそろ静岡を通過するぐらいだろうか。今海が見えた。静岡に海はあったかどうかを日本地図を頭に思い浮かべて確認する。

実家の自分の部屋側のベランダにはプランターが置かれていて、父はそこでラディッシュを育てていた。朝、父がラディッシュを間引いている時があり、父はラディッシュと会話をしているのか、父の独り言が聞こえて来たことを覚えている。

美学者の今道友信先生が提唱した「エコエティカ」の思想について考えを巡らせる。現代人が生きる生活空間は、深く科学技術の影響を受けている。今道先生は、そうした生活空間を「生圏」と呼び、それは様々な技術の影響が高階層的に連なった空間であるとする。こうした新たな生活空間で生きる人間の生き方を提唱していくのがエコエティカである。保守派の論客であった西部邁先生の

『国民の道徳』という書籍と合わせて、今道先生の『エコエティカ』を読み進めていく。その書籍の受け取りは明日である。

日本に帰って来てからの食生活も良好だ。良質なベジタリアン食を摂ることができている。レオナルド・ダ・ヴィンチ、アルバート・アインシュタイン、劇作家のジョージ・バーナード・ショウ、そしてカール・ルイスもベジタリアンだった。先日細身美術館を訪れた時に知ったが、伊藤若冲もベジタリアンだった。

彼らに共通していることと自分に共通していることはなんだろうかと考える。ベジタリアン食を継続することによって、心身が浄化され、霊的な力が涵養されていることを実感する。

今、新幹線は小田原駅を通過した。1年振りの東京が迫って来ている。東京に向かう新幹線の中で:2020/10/19(月)11:22